

7 2001年度現場後代検定成績からみた種雄牛の特徴

ねらいと成果

肉質、肉量ともに優秀な種雄牛を造成するために1998年度から現場後代検定法を実施している。2001年度は鶴雅土井、照明土井、豊菊波の検定が終了し、検定成績に基づいて育種価を算出したところ3頭とも肉質に優れた種雄牛であることが判明し、今後の活躍が期待される。

内 容

現場後代検定法は、1種雄牛当たり16頭の産子を検定調査牛とし、肥育農家と北部農技で8頭ずつ28～32か月齢まで肥育して得られた枝肉成績から種雄牛の産肉能力を判定するものである。2001年度に検定が終了した種雄牛についてその成績をもとに推定した育種価を表1に示した。

鶴雅土井は美方郡浜坂町で生産された種雄牛で父牛は第2安鶴土井である。豊菊波は美方郡温泉町で生産された種雄牛で、父牛は幸豊土井である。

両牛とも枝肉重量の育種価は小さいものの脂肪交雑の育種価は各々1.129、1.132と高く、肉質が売り物の種雄牛であると評価される。照明土井は洲本市で生産された種雄牛で、父牛は照長土井である。枝

肉重量の育種価は5.620kg、脂肪交雑の育種価は1.489と極めて高く評価されたが、残念ながら本牛は脂肪壊死症によりすでに廃用になっており、凍結精液が保存されているのみである。

北部農技で実施した検定調査牛の飼料摂取状況を表2に示した。粗飼料（乾草と稲ワラ）摂取率では照明土井が最大、豊菊波が最小であったが、体重1kg増加に要した可消化養分総量（TDN要求率）は鶴雅土井が最も少なく飼料効率が良いことが判明した。

今後の方針

豊菊波、鶴雅土井はともに肉質タイプの種雄牛として全県的に供用されることが期待される。照明土井は精液数量に限りがあることから、種雄牛または種雌牛取得用の指定交配を主として供用すべきと考えている。今後とも現場後代検定を中心として種雄牛の能力評価を実施していくが、より肉質、肉量の優れた種雄牛造成のために検定の精度を上げるべく事業推進を図っていく。

野田 昌伸（北部農技・畜産部）

表1 検定済み種雄牛の育種価

種雄牛名号	鶴雅土井	照明土井	豊 菊 波
枝肉重量(kg)	-25.159	5.620	-32.283
ロース芯面積(cm ²)	-3.355	1.566	-1.501
バラの厚さ(cm)	-0.523	0.012	-0.293
皮下脂肪厚(cm)	-0.817	-0.658	-0.588
歩留基準値(%)	0.212	0.713	0.528
脂肪交雑	1.129	1.489	1.132

表2 検定期間中の1頭当たり飼料摂取状況

種雄牛名号	鶴雅土井	照明土井	豊菊波
前期配合飼料(kg)	1328	1322	1094
後期配合飼料(kg)	2605	2780	2702
乾草(チモシー)(kg)	572	604	341
稲ワラ(kg)	591	691	566
粗飼料摂取率(%)	22.8	24.0	19.3
TDN要求率(kg)	8.41	9.27	9.11